

服部匡著 『服部匡日本語論考選集』

(和泉書院刊、2021年7月31日)

丹羽哲也

本書は、故服部匡氏（1957年～2020年）の日本語文法を中心とする著作の中から、主要な論文27篇を選んで収めたものである。編者は服部氏の友人である田野村忠温氏で、「序」と「跋に代えて」に本書の編集方針や出版に至る経緯が記されている。

本書は、編者によって、各論文が次のような見出しのもとに分類・配列されている。括弧内は、各項目の論文数および扱われている題材を筆者が付け加えたものである。

- 音韻と意味（1篇：動詞のアクセント変化）
- 終助詞（4篇：終助詞「わ」、「ね」「な」）
- 否定・疑問（4篇：「～か」、「めったにしか・ろくにしか」「全く、全然」）
- 尺度性・相対性（14篇：「あまり、さほど」、「大して、大した」、「なかなか」、「～どころか」、「だけ、ばかり」、「多少、少し」「多い、少ない」、「少し」、「～性+形容詞」など、「漢語動名詞+先」）
- 文体（4篇：「～している、～しておる」、複合格助詞（「において」など）、「～てございます」、「～的な／の」「ある／いる」「全く／全然」など）

巻末に、服部氏の著述目録が掲載されていて有益である。

以下、服部氏の研究の特徴をよく表す論考をいくつか取り上げるが、それらの精密な分析や論の展開を追っていく紙幅はないので、例文や図の引用によって概略を紹介するにとどめる。

「音韻と意味」の1篇「動詞のアクセント変化における意味特性の関与について

て」は、著者の出身地である三重県方言の動詞のアクセントについて、地元の話者を対象に調査したものである。この方言では、動詞のアクセント変化が進行中だが、その中で古形のアクセントを保ちやすい動詞もあり（「思う、限る、困る、分かる」など）、それらは状態性という意味特性を持つ動詞であることを指摘している。著者の研究の主要部分は文法の領域であるが、方言アクセントを扱った本論は、著者の関心の広さを示している。

「終助詞」の項の中の「汎性語の終助詞ワについて」は、「あれ、雨が降ってるわ。」のような終助詞「ワ」の意味・用法を扱うもので、「話者の内部で明瞭に認識された事柄の表明」という基本的な意味を措定し、発話状況や発話内容による「ワ」の使用の可否を詳細に分析している。たとえば、独言的な発話の場合、「ワ」は「新たに生じた明瞭な認識を表すものに限られる」という制約があると主張する。

- (1) (メモを見て会議の時間を確かめ)

会議は2時からや{わ}。まだ早い。

- (2) (会議の時間は知っており、時計を見て)

会議は2時からや{?わ}。まだ早い。

「会議は2時からや」という「ワ」のない発話は(1)(2)ともに可能であるが、「ワ」を伴うか否かは両者で異なる。(1)はその場で会議の時間を認識したという状況で、「ワ」を用いるのが自然だが、(2)は会議の時間が既に認識されていることであり、こういう場合に「ワ」を用いるのは不自然であるという観察を示している。ここに例示したようなきめ細かでの確かな分析は、本書全体を貫くものである。

「尺度性・相対性」の項の諸論考は、本書の中心をなしている。その前半は、「あまり」「さほど(それほど)」「大して、大した」「なかなか」といった副詞類の意味・用法を考察したものである。各語の意味の定義や具体的な用法の分析はそれぞれの論文で独立しているのだが、これらの中には尺度の正負という著者の一貫した関心が見られる。上記の副詞が用いられる文において、

- (3) 彼はあまり|背が高くない・?背が低くない|。

- (4) 所要時間は大して|長くない・?短くない|。

- (5) この犬はなかなか|利口だ・?馬鹿だ|。

(6) 彼の部屋はさほど|広くない・狭くない。

(3)～(5) は反対方向の述語の一方が自然でなく、(6)はどちらも自然である。述語の方向性として、「大きいー小さい、長いー短い、広いー狭い、厚いー薄い、(背が) 高いー低い」あるいは「良いー悪い、おいしいーまずい、利口だー馬鹿だ、上手だー下手だ」とった正方向ー負方向の対立があり、「あまり」「大して」「なかなか」は負方向の述語には用いられにくく、「さほど」はそういう制約がない、という指摘がなされている。

このような正負の対立への着目は、「～どころか」という表現を扱う論文でも發揮されている。「～どころか」は通常の肯定・否定よりも高段階にあることを示す表現であり、その方向性において、「延伸型」と「対極型」という二つのタイプがあることを指摘している。

(7) a 成績は、優どころか秀だった。

p から見て、P よりなお遠い位置に Q がある場合 (延伸型)

p —————→ P —————→ Q
 良/可 優 秀

b 成績は、優どころか不合格だった。

p から見ると P と反対側に Q がある場合 (対極型)

P —————→ p —————→ Q
 優 良/可 不合格

さらに、「小さな量を表わす表現の意味的性質について」という論文では、「少し」のような小量表現において、「(～は) 少しある」のように連用修飾要素として用いられる場合と、「(～は) 少しだ」のように述語として用いられる場合との相違が論じられている。たとえば、次の (8) a の文は自然な表現だが (8) b の文は不自然、(9) a の文は不自然で (9) b の文は自然である。

(8) a お金を少し持っているから、鉛筆ぐらいは買える。

b #持っているお金は少しだから、鉛筆ぐらいは買える。

(9) a #お金を少し持っているから、鉛筆も買えない。

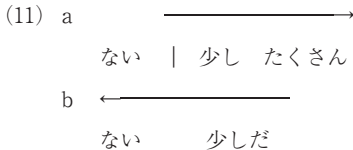
b 持っているお金は少しだから、鉛筆も買えない。

これに対して「たくさん、多い」のような大きな量を表す表現の場合は、

(10) a お金をたくさん持っているので、好きなものが買える。

b 持っているお金は多いので、好きなものが買える。

というように連用用法でも述語用法でも文の適格性に差はない。この現象について、連用的な「少し」は (11) a のように「少し→たくさん」という正方向のスケール上にあり、述語としての「少し」は (11) b のように「少し→ない」という下向きスケールにあると述べている。



このような尺度の正負の方向性や小さな量を表す表現については、これまで問題にされることも少なく、服部氏の論考の独自性が顕著である。

「尺度性・相対性」の項の後半は、「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係 — 通時的研究 —」に始まる一連の論考である。例えば「可能性」という名詞は、その程度の大きさを表すのに、種々の形容詞を用いることが可能である。

(12) 可能性が{高い・強い・大きい・多い・濃い・深い・大だ・濃厚だ}。

この論文は、国会会議録のデータを対象に、1947年～2006年を10年ごとに区切り、「可能性、公共性、生産性、危険性、必要性、公益性、蓋然性、信頼性、緊急性、安全性、収益性、逆進性」という名詞について、それぞれどの形容詞が用いられやすいか、その共起傾向の変遷を調査したもので、その結果がグラフで示されている。

「可能性」で言えば、1947年からの10年間では「可能性が多い」が全体の62%ほどを占めるが、1997年からの10年間では2%ほどに減少している。それに対して、「可能性が高い」は、0.5%ほどであったのが、上昇して74%ほどを占めるようになってきている。上の他の名詞においても、「多い」あるいは「強い」の比率が減少し、「高い」の比率が上昇している（ただし「逆進性」だけは一貫して「強い」の比率が高い）。また、「可能性が低い、弱い、小さい、少ない、薄い」という小程度を表す形容詞については、用例数が少ないものの、「低い」との共起比率が上昇している語が見られる。「～性」以外の名詞においても、「失業率、貯蓄率、死亡率」、「危険度、依存度、利用度」といった名詞では、「高い」

が上昇傾向にある、ということが示されている。

「名詞と尺度的形容詞の共起傾向の推移 — 国会会議録のデータから —」はその続編で、何らかの意味で程度的属性を表す名詞全般について、その程度を量る形容詞との共起傾向の変遷を調査したものである。「高い」を例に取ると、「物価、地価、値段、水準、レベル」などの名詞は、1947年から2006年までの間一貫して99%以上の例が「高い」と共起する。その一方で、「必要性、緊急性、リスク、公共性、信頼性」などの名詞は、この間に30ポイント以上、共起率が上昇しているという。同様に「変動、変化、開き、額、余地、メリット」といった名詞は「大きい」との共起率が上昇し、「感じ、空気、疑い、不満」といった名詞は「強い」との共起率が上昇している、というように、168語もの名詞の共起率の変遷を逐一調べ上げた労作である。

これに続く論考も合わせて、このような問題に着眼し調査したというのは他にないもので、服部氏の独壇場と言い得る研究である。

その他、「ダケ・ばかりについて — ガ、シカとの共起 —」という論文では、

(13) あなただけじゃが・?だけ頼りだ。

(14) 田中さんしか・だけしか来なかった。

のような、「だけが」と「だけ」の相違や「だけ」と「しか」の共起の問題を扱っている。副助詞については筆者も論文を書いたことがあるのでよくわかるのだが、「だけ、ばかり、しか」についての先行研究があまたある中で、現代語の共時的な研究においては、この論文を超える水準の研究はない。

この紹介文のために服部氏の諸論考を再読して、その着眼の独創性、分析の精緻さ、結論を導くに至る（あるいは保留する）慎重な態度といった点を、改めて確認することになった。

本書の随所に「今後の課題としたい」、「別の資料に基づいて解明していきたい」、「なお慎重に検討を要する」、「さらに検討する必要がある」等々の文言が見られ、実際に、同じテーマで再論・補論した論考もある。筆者としても、各論考の成果を受けとめた上で、さらにこれがどのように展開していくのか続きを読みたくるところが少なくない。しかし、その機会は今では失われてしまった。残念でならない。

(2021年7月31日 和泉書院 A5判 508頁 14,300円)